

国際会議出席報告

— 2013 年度後期若手研究者海外学会出席助成 —

第 7 回国際イネ遺伝学シンポジウムに参加して
岡村昌樹
(東京大学大学院農学生命科学研究科)

米国農学会・米国作物学会・米国土壌学会
2013 年国際大会に参加して
安田裕基子
(東北大学大学院農学研究科)

2013 年 11 月 5 日から 8 日にフィリピン、マニラにおいて行われた第 7 回国際イネ遺伝学シンポジウム (The 7th International Rice Genetics Symposium) に参加した。このシンポジウムは国際イネ研究所 (International Rice Research Institute, IRRI) が主催したシンポジウムで、3 日間で計 18 の口頭発表からなる全体セッションと 8 分野からなり計 58 の口頭発表からなる個別セッションに加えて、400 以上の発表数となるポスターセッションが設けられた。その内容は植物種こそイネに限定されているものの、実用的な育種法から分子遺伝学までと多岐にわたっており、非常に興味深い発表が多かった。特に個別セッションやポスターセッションでは、特定の地域に根差した問題を研究テーマとして扱っているものも多く、日本国内の学会ではなかなか聞けないような話を聞くことができた。

私は 8 分野からなるポスターセッションの「Gene Regulation」という分野において「Relationship between tiller angle, gravitropism and starch content in a low stem starch rice mutant」という題目で発表を行った。年齢も国籍も様々な方が発表に興味を持って下さり、有意義な議論を行うことができた。しかし、より深い議論を行うためにはさらなる英語力の向上が必要であることを痛感した。フィリピンに滞在中、英語を用いて生活をしていく中で少しずつ英語に慣れ、英語力の向上を実感できただけに、日々の努力に加えて、こういった国際学会へ積極的に参加していくことが英語力上達への近道ではないかと感じた。

会期の最終日の 8 日はシンポジウム主催のフィールドツアーに参加し、ロスバニョスにある IRRI の実験圃場を見学させていただく予定であったが、あいにくの大型台風の接近によりツアーは中止となってしまった。非常に楽しみにしていただけに残念ではあったが、またの機会にとっておきたいと思う。

最後に、本シンポジウムへの出席にあたり、日本作物学会の若手研究者海外学会出席助成による援助を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

米国農学会・米国作物学会・米国土壌学会 2013 年国際大会 (ASA, CSSA, and SSSA 2013 International Annual Meetings) に参加した。本会は 2013 年 11 月 3 日から 6 日にかけて米国フロリダ州タンパ市のタンパコンベンションセンターにおいて、「持続可能な世界のための水・食料・エネルギー、そしてイノベーション」というテーマで行われた。今回は 46 のプログラムに 4000 人余りの研究者、教員、学生が参加した。

セッションの内容は狭義の作物学・土壌学にとどまらず、植物病理学や昆虫学、更には環境保全のための現地住民への教育手法などに至るまで多岐にわたった。また、アメリカ中西部では農業用水の確保が重要な課題となっていることから、トウモロコシ・牧草・芝生などの耐乾性や耐塩生に関する研究が多く発表されていたのが印象的だった。

11 月 4 日にはオーラルセッション「福島における土壌科学者の戦い」を聴講した。このセッションでは土壌に含まれる放射性物質を深度ごとに効率良く測定する方法や、竹の繊維で作ったチューブを用いて土壌表面のセシウムを効率よく地中に分散させる方法等が示され、とても興味深かった。一方で、発表者の所属が東北地方以外の機関に限られていたことが、福島県出身の自身としては少々不満に感じられた。

私は 11 月 5 日のポスターセッション「ダイズの総合的応用研究Ⅱ」に参加し、「根粒超着生系統のダイズは耐塩性を持つ」のタイトルでポスター発表を行った。発表中の英語でのやり取りでは自力で解答できることもあったが、全体的に苦戦し、非常に悔しい思いをした。特に一から説明を求められた時に殆ど答えられず、英語力だけでなく説明力不足も痛感することとなった。一方、会場に用意したポスターの縮小版は発表前にすべてもらわれて無くなったことから、ポスター自体に興味を持ってくれた人は一定数いたようで、その点では良かったと思う。

今回は自分の分野以外の研究内容に触れることで知見を広げられたとともに、国際的な発表の場における自分の力のなさを痛感した。今後は機会があればまた発表させてもらえるように、研究に励むだけでなく説明力と英語力の向上に努めたい。

最後に、本会への出席に際して日本作物学会より助成を賜り、貴重な体験をする機会を与えていただきました。この場をお借りして日本作物学会に厚く御礼申し上げます。